社会福祉法人 清水あすなろ福祉会
法人だより
福祉情報を発信します
風の子保育園・あすなろの家・ともの家
No 13 平成30年6月20日
静岡市清水区山原 871-2
Tel 054-363-2046

あすなろの家

地域と繋がる 参観会を開催

ー老人ホームを もっと身近な場所に！ー

4月21日（土）、昨年に続き、あすなろの家「参観会」が開催されました。

お天気にも恵まれ、地域の方をはじめ多くの方が来られました。地域交流室では、特養家族会総会、ボランティア交流会、特養オムツゼロ報告会が行われ、ピロティでは協力業者の出店をはじめ職員のたこ焼きが。他にもデイサービス、特養、ケアハウスで多様な催しものが行われました。

子ども同士であすなろの家の坂を上がってくる姿を目にし、子どもたちにも認知されていることもうれしく思いました。

あすなろの家 30年度は新たなステージへ

～私たちが作る本物～

本物のケア・技術：お年寄りの力を引き出すケアで、自立支援介護を活かしていく

本物の接遇力：丁寧な対応で、高齢者の生活を支え、笑顔をつくりだす

地域と繋がる：社会福祉法人の役割は、地域における福祉を発展させていくこと、まずは、あすなろの家が考えていることをもっと地域に伝えていく

これは、あすなろの家が進んでいこうとしている方向性であり、これを実際動かしていくのは職員である。

ご利用者と実際に関わっている職員、調理を行っている職員、来客者の対応をする職員、掃除等を行う職員。

それぞれ担当は違うが、そこで働く職員が、あすなろの家がやりたいことをきちんと理解し、そのために何をしていくのか、何をしていきたいのかをじっくり考えて行動していく。私たちが思い描く、あすなろの家を作っていく、動かしていく。

今年度は、今まで積み上げてきたものに「私たちが」を加えていきます。

一番楽しかったことは、
大型遊具 です！
コマ… 縄跳び… です

大きくなったら、
サッカー選手
…保育士さん
……ケーキ屋さん
になりたいです！

風の子保育園 卒園式 ２４人が卒園➡小学校へ

—初めて卒園式に参加して—

子どもたちの歌声の力強さ、のびやかさにびっくり！

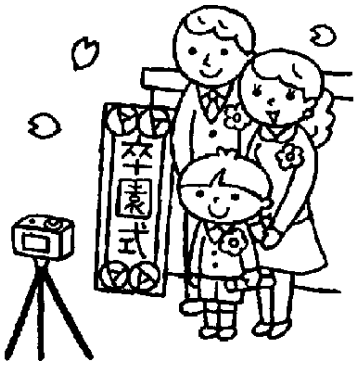
法人理事　苅和弘美

3 月 27 日、塩田川の桜が満開のなか行われた、風の子保育園の卒園式に参列させていただきました。

式は卒園児の歌で始まりました。その歌声の力強さのびやかさにまずびっくりしました。

園長先生から証書を受け取り将来の夢を緊張しながら発表したり、太鼓やスイミーの劇を元気いっぱい発表する姿に、園での生活が充実していたことが想像できました。保護者の方もお子さんの成長をかみしめる日になったことでしょう。

晴れやかな節目の日に立ち会えて、私も幸せな気持ちになりました。風の子保育園で培われた力で、小学校でものびのびとその子らしく成長していってほしいと思います。



風の子保育園４０周年記念事業

□記念行事として、卒園生・職員による「風の子まつり太鼓」
□職員による劇　□祝い太鼓
□卒園生集い　□記念誌の紹介

日時　平成 30 年 8 月 11 日 18 時～
場所　風の子保育園

※当日は 500 円セット（手作り焼きそば・フランクフルト・風の子クッキー・お茶）を用意しています。

40 周年記念誌（「どろんこ」）は記念品とさせていただきます。

平成 30 年度事業計画

今年平成３０年度は、開設 40 周年記念事業として、上枠イベントと、過去 10 年間を振り返りまとめる記念誌の発行に取り組みます。

23 人の職員で 104 名の子どもを保育しますが、園長・主任体制での主任・リーダー・クラス主任の役割を明確にしていきます。

他に、指定研修、全国保育団体合同研究集会、地域事業として保育体験・一時預かりにも取り組みます。

ともの家・支える会会長　桑原さん…　静岡新聞に大きく掲載

「親離れ・子離れが生きる力を引き出す」ことも

法人の「地域福祉懇談会」で、保護者の高齢化：「老障介護」の不安を訴えた桑原さん。その一つの答えを、自ら静岡新聞に打ち明け、大きくとり上げられたので紹介します。

4/30 付静岡新聞夕刊

桑原さん父娘(静岡)の軌跡

障害ある子と親 程良い距離感

母亡くして「生活力」育つ

親子とも自分の人生を

母を亡くして……でも

娘さんは２年前にお母さんを失い、生活環境が変わりました。「今までは『お母さんに相談しなきゃ』が口癖だった娘が、自分で物事を選択するようになった。買い物をするうちに大まかな金銭感覚が身についてきた」と、娘さんの生活力が表れてきたと感じられ、「親は『自分がいなければこの子は生きられない』と思い込みがちだが、親離れ・子離れが本人の生きる力を引き出すのでは」という問いかけをされています。

「親離れ」したがっていることも……

ともの家施設長・滝戸さんも、仲間たちは親が大好きだけど、親離れもしたいと思っていることに気づいてほしい。早めに信頼できる他人を見つけて委ねることで、親自身も自分の人生を生きられるはず」と紙上で語っています。

それぞれ異なる生活環境で障がいを抱え、悩みもそれぞれだと思いますが、仲間が本人らしく生活できる環境が整うことで、その親御さんも安心できるのではないでしょうか。

ともの家 30 年度事業計画は

ともが法定施設に移行してまる１０年。職員も半数が制度移行後に入職。その中で、「仲間たちの声なき声を聴き、多様な支援を創意工夫する」柔軟な運営や専門性を維持する努力を続けます。

就労継続 B 型事業は、仲間たちの働く場として、継続的に経営できるお店づくりに努めます。

生活介護事業は、人数も多く、年齢も様々な中で、働き方や内容に変化が求められています。一人ひとりの仲間の要求を聞き、実践できる職員の資質の向上と環境整備を柱とします。

グループホームは、仲間やその家族の状況に合わせて体制と組み替えてきました。今後も、その都度対応できるよう、体制を整えていきます。

仲間の高齢化と親亡き後の仲間のくらし

親亡き後の暮らしの場は、グループホームという形で運営していますが、将来的には、高齢を迎えた仲間たちが平日の日中もホームで過ごすことができる体制を整えます。

さらに、親の高齢化で懸念されるのは、成年後見人をどのタイミングでつけるかです。自己判断が難しい仲間たちが親亡き後、不利益を被ることがないように保護者に積極的に働きかけます。

社会保障制度改悪を許すな

理事長　杉井則夫

「2025 年問題」の次は「2040 年問題」か？

「2025 年問題」がいわれてしばらくたちます（2025 年に団塊の世代がすべて 75 歳以上になる）。今、それにプラスして「2040 年問題」いわれています（65 歳以上の高齢者率が 36.1％、労働力人口が 2011 年度から見て 1200 万人減って 5400 万人に減少する社会）。

こうした見通しの中で社会福祉はこれからどうなるのか、どうあるべきなのか考えてみます。

発想が逆の「自助→共助→公助」自己責任を強調！

社会保障制度は、憲法 25 条で保証された国民の生存権を国の国民に対する義務として法制化したものです。しかし現在政府が進めようとしているのは、社会保障に対する国の責任を投げ捨て、社会保障給付を抑制し、自己責任と自助、共助を強調することです。

医療、介護保険、生活保護制度など社会保障の根幹をなす部分で、国民負担が歯止めなく増大しようとしています。部分的には「全世代型社会保障改革」と称して保育、教育等に一定の給付を行い、福祉が向上しているかの如く装っています。これは世代間対立をあおるだけでなく内容的にも様々な問題点を含んでいます。

政府は盛んに「自助、共助、公助」といっていますが、発想は全く逆でまず公助が無ければなりません。

今推し進められようとしているのは

１）社会保障給付の抑制と利用者負担の増大

２）社会保障の市場化と営利目的化

３）社会保障に対する国の責任の放棄です。

具体的な中身はたくさんありすぎて書ききれませんが、安倍政権の 5 年間で社会保障負担増と給付減で 6 兆 5 千億円と試算されています。

社会保障の財源・・・？

社会保障の話になると財源問題が必ず持ち出されます。消費税１０％になったとき増税の 2％分は全額社会保障費に回ると宣伝しています。これは裏返すと、社会保障費を増やしたければ消費税を上げろということになります。

このまま社会保障費を消費税でまかなおうとすると、消費税は２０％、３０％とならざるを得ません。

税の「所得再配分機能」はどこへ？

ここで税の本質的性格が問われます。税は所得再配分機能により、高額所得者が多く負担し、低所得者は税を免除もしくは低い税率にすることが本来です。

安倍政権は全く逆で、税の不公平感を解消すると称して、企業や高額所得者の税率を大きく引き下げ、消費税という逆進性の税を増やすという真逆の経済政策をとっています。これが安倍首相のいう機動的な財政政策ということにほかなりません。

これらをしっかり踏まえたうえで不足分が出たらどうするかという議論にしないと、財源が足りないから社会保障も切り捨てるという、国の義務を放棄することになります。

あすなろ福祉会のホームページの役員のつぶやき欄でもう少し詳しく述べたいと思います。近日中に up しますのでご参照ください。

評議員 栗田知明さんご逝去

昨年からの新体制で評議員に就任いただいた栗田知明さんが、去る 3 月 3 日にご逝去されました。あすなろ福祉会の創設にご尽力いただき、それ以来役員としてご支援いただいてきました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。